令和六年度 九州歯科大学歯学部 大学院入学式

式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。保護者の皆様 本日は誠におめでとうございます。心よりお歓び申し上げます。

桜も満開となり、本格的な春の訪れを感じる季節となりました。そのような中、本日、第 76 回九州歯科大学歯学部入学式、また第 59 回九州歯科大学大学院入学式を、5年ぶりにコロナ前と同様、一部保護者様にもご臨席頂く形で挙行できましたことに、関係者一同、この上もない慶とするところであります。

また本日、ここに、服部誠太郎福岡県知事ならびに香原勝司（こうはらかつじ）福岡県議会議長をはじめ、多くの来賓の方のご臨席を賜りましたことに対し厚く御礼申し上げます。

本学は全国の 29 校ある歯学部、歯科大学の中で唯一の公立大学で、歯学科と口腔保健学科からなる歯学部と、修士課程口腔保健学専攻と博士課程歯学専攻からなる大学院を有する「口腔医学の総合大学」

として、110 年という長い歴史と伝統、ならびに輝かしい実績を持って歯学教育及び歯科医療の発展に貢献して参りました。

本学が平成 27 年に定めた九州歯科大学憲章においては、次なる世紀に向けて患者中心の歯科医療を提供できる人材の育成を第一義に掲げており、全人的歯科医学教育活動を通じて人間性豊かな実践的な歯科医療人の育成を行なっております。

新入生の皆さんは、歯科医師ならびに歯科衛生士といった歯科医療人を目指す道を選ばれました。歯科医療人とは人々の健康と幸せに貢献するという、高い使命感と責任感を持った職業です。歯科医師、歯科衛生士になるためには、専門的な知識と技能はもちろん、人間性や倫理観、コミュニケーション能力など、多くの資質と能力を身につけなければなりません。

当然、新入生の皆さんは理解していることと思いますが、本学に入学することはゴールではありません。今日を境に、皆さんは、社会に貢献できる歯科医療人になるべく、それぞれの目標に向かってスタートを切ることになります。

一方、グローバル化の進展や AI 技術をはじめとする技術革新などに伴い、社会構造も急速に、かつ大きく変遷しており、予見困難な時代の

中で新たな価値を創造していく力を育てることが必要となっています。そのため、文部科学省の新学習指導要領で定めた「生きる力」を育むための『学力の3要素』である「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、そして「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」を育成・評価することが重視されており、近年、教育全般に及ぶ改革の中、高大接続改革の名の下、高校教育、入学者選抜、大学教育においても一体的な改革が進められてきています。特に、大学においては、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度が求められます。

本学は他の歯学部、歯科大学に先駆けて、学位授与の基準であるディプロマポリシーと併せて、それを満たすのに必要な卒業コンピテンシーを明確に定めて、それらを修得するために必要な教育過程を一貫して提供するアウトカム基盤型教育を実施しています。昨今、歯科医療を取り巻く環境が、大きく変わろうとしている中で、「何を学び、身に付けることができたか」が常に問われており、大学での学びにおいては、受動的な学修ではなく、主体的な学修であるアクティブラーニンングが必要となります。皆さんの多くは、卒業後、医療現場や地域保健の現場で従事することになりますが、そのような現場では常に、様々な問題・課題に遭遇し、それらを解決することが求められます。そのためにも常日頃から、主体的学

修を行う中で、自ら課題を発見し、解決する能力を涵養していくことを是非、心がけてください。

さて、今回、大学院に入学した皆さんは、それぞれが何らかの目標を持って大学院への進学を目指されたかと思います。大学院においては、本学の基本理念の中に「高度な専門性を持った歯科医療人の育成」と「歯科医学を支える研究の推進」が謳われている通り、大学院での研究活動や臨床現場での専門的な学びを通じて、皆さんには地域から世界に向けて歯科医療、医学をリードする歯科医療人に成長することを強く願っています。

先ほど、主体的学修についてお話をさせていただきましたが、大学院での学び、特に研究活動は、まさしく未知との遭遇になります。研究活動は、解のない問題に対峙するところから始まります。歯科医学分野には、まだまだ多くの課題が存在しています。それらを解決するためには、基礎研究から臨床研究、疫学研究など、場合によっては他分野との連携を通じて、自らが考えて、行動することが求められます。研究活動では、知的好奇心を失わず前向き且つ主体的に臨むことが大切で、時に研究がうまくいかない時があっても、自らの能動的な取り組みは、次の行動に繋げる一つの切掛けになります。

アメリカの発明家のチャールズ・ケタリングの言葉に、「この世の中には最初からうまくいくものなどほとんどない。成功へと至る道では、失敗、それも度重なる失敗が道しるとべなる。失敗したくなければ、何もせずじっとしているほかない。試行錯誤を重ねながら、成功を目指して一歩一歩前進していくことが大切だ。」とあります。この言葉は大学院生だけではなく、ここにいらっしゃる皆さん全てにとっても大変参考になる考え方ではないかと思います。研究はクリエイティブな活動です。是非、今まで、経験したことがない様々な事にチャレンジしてください。大学院修了の際には、自分が取組んだ成果が、本当に誇らしいものになっているはずです。

わが国は、人口減少社会と言われているように少子高齢化とともに生産年齢人口が減少し、様々な分野において労働の担い手となる人材が不足する事態となっています。このことは歯科医療業界においても同様であります。歯科医師の養成に関しては、国立大学は医学部の定員を増やす反面、歯学部の入学定員を減らし、私立大学においては、多くの大学が志願者数や国家試験の合格者数が大幅に減少している状況にあります。また歯科衛生士は全国的に常に人材が不足している状況で、毎年の求人倍率は常に 20 倍を超える状況となっています。このような中で、全国唯一の公立の歯科大学である本学は、地域歯科医療を守る専門家

である歯科医療人、歯科医師及び歯科衛生士を育成する医育機関としての責務があり、その役割が相対的に増していっていると考えております。

2024 年、世の中がコロナ後初めての新年を迎えて、久しぶりに家族が多く集まっていた元旦に能登半島地震が起こり、多くの方が被害に遭われ、当たり前だった生活ができず、避難を強いられて苦しんでおられます。今回、熊本地震の時と同様、本学附属病院の歯科医師と歯科衛生士からなるチームが、日本災害歯科支援チーム JDAT の一員として能登半島地震の被災地にて歯科医療支援を行ないました。口腔の健康は、全身の健康や人としての生活の質（QOL）を維持していく上で非常に重要であります。今回の震災で多くの方がお亡くなりになりましたが、被災された方の多くが高齢者で、震災関連死を防ぐためにも、早い段階での口腔健康管理を行っていくことが必要です。多くの災害を経験してきた結果、災害の場において、歯科医療の支援が必須のものとなっており、本学のチームを始め、全国の様々な歯科医療機関からのチームが被災地支援にて奮闘しております。

今回のような特殊な状況以外においても、超高齢社会を迎えるわが国の医療・福祉の現場では、地域住民の命、生活、尊厳を守るための歯科

医療の重要性が増してきています。そのため本学は、教育研究目標にも掲げているように、全身の健康という視点に立ち、いかなる社会構造の変化にも対応し、多職種と連携し、歯科保健医療を通じて地域社会に貢献することができる歯科医療人の育成に力を入れていきます。

本学は、昨年度からコロナ禍で中断していた国際学生交流プログラムを再開して、昨年度はタイの2大学、台湾の3大学と直接、双方に学生の行き来を通して、交流をすることができました。Think globally act locally（地球規模で考え、足元から行動せよ）という言葉があるように、今、我々が抱えている問題の多くは、地球規模の問題が多く、地球規模の問題を解決していくためには、まずは身近なところから行動をすることが大切であるということで、国際学生交流プログラムを通じて、日本以外の国の現況を同じ歯学生を通じて学ぶことは、広い視野を培うことになり、世界的な視点で物事を考える、Think globally が深まるきっかけになると信じています。

学生の皆さんはすでに 18 歳以上ですので、選挙権も持ち、社会的にはある意味、成人という立場です。先ほども私の言葉で、予見困難な時代という言葉を使いましたが、皆さんの未来は、決してコントロール不能で、ただ運命を待つだけのものではなく、皆さんの未来は、皆さん自身が

創造していくものでもあります。歯科医療を通じて、地域住民、国民の健康維持増進に寄与していくためには、社会の安定が基盤となります。現代の健康問題で健康格差という言葉がありますが、この問題の背景には、経済格差や様々な社会問題があり、我々が携わっていく医療は、社会の現況と切っては切れない関係にあると言えます。新入生の皆さんには、歯科医療人を目指す本学の学生であるという自覚と合わせて、社会の一員であるという認識を強く持ってもらい、社会に関心を持ち、積極的に社会参加をして、日本の明るい将来のために自分の未来は自分で切り開くといった気概を持っていってほしいと願っております。

　ここにいる多くの新入生は、保護者のもとを離れて、生活していくことと思います。一人で生活することは、人生の中では大変貴重な期間となります。最初は、慣れない一人暮らしで、食事の支度、掃除、洗濯など大変かと思います。時には寂しいこともあるでしょうが、保護者から干渉されず、もしかしたら自由を謳歌できると考えるかもしれません。ただ忘れてはならないのは、多くの学生さんは保護者の支援の下で、学生生活を続けていくことができるということ、今までもしかしたら、洗濯などの家事を一度もせず、ここまで育ってきた人がいるかもしれません。改めて学生生活を送る中で、おそらく皆さんを支えてくれている保護者に感謝する

気持ちが自然と湧いてきて、その時の、その気持ちを生涯忘れないで過ごすことが、皆さんの力になるはずです。

最後にアメリカの著名な作家のデール・カーネギーの言葉を紹介します。

曰く、「I spend every day while sprinkling the thankful word from deep consideration. This makes a friend and key to move a person.　深い思いやりから出る感謝のことばを繰り返しながら日々を過ごす。これが、友をつくり、人を動かす鍵となります。」先ほどの保護者に対する感謝の気持ちを含めて、感謝は当たり前と思っていたことが実は当たり前ではないのだという発見から生まれてきます。新しい環境で、多くの出会いがある中で、まずは思いやりを持って相手に感謝の気持ちを持って接し、それを言葉として伝えることによって、相手の気持ちを肯定的に高めることになり、それが自分自身の肯定感の向上にもつながり、結果的に友人関係が深まり、より過ごしやすい学生生活に結びつくのではないかと思います。これは挨拶をすることにも通じています。まずは挨拶から実践してみてください。

以上、今後の皆さんの学生生活が楽しく充実したものになることを祈願しまして、私の式辞とさせていただきます。

令和6年4月3日

公立大学法人　九州歯科大学　理事長･学長　　粟野　秀慈